

立川正衛さん（刃物研磨担当の人）、お世話になりました。

文化サークル、壁新聞、新潮劇団、飯島さん（没）、木下さん（没）、野村先生（没）、松原さん（没）、皆さんにお世話になり有り難うございました。亡くなられた皆様のご冥福を心からお祈り申し上げます。

三、収容所からダモイ、日本上陸までの概況  
昭和二十四年一月、エバロン三〇一収容所は閉鎖することになり全員五百余名コムソモリスク第六分所に転勤。ここでは主に大作業で、田中康夫さんたちと合流、約十カ月。ナホトカへ。

昭和二十四年十一月三日、待ちに待ち、夢にも見たダモイ。日本舞鶴港着。ソ連抑留生活四年三カ月。ご苦労様でした。万歳。

### 三〇一会・会員シベリア回顧

神奈川県 藤野 一 正

一、昭和十二（一九三七）年徴集の第一乙種兵、仲間は次々と召集を受けたというのに私が赤紙（召集令状）を受け取ったのは十六年の八月。それも地元の高崎で新潟県の新発田連隊でした。一週間も経ず玄界灘を越えて初めて外国の地を踏んだのは朝鮮半島の釜山港で、それから鉄路北に進み、満州国との国境を流れる豆満江の手前会寧が終着駅でした。陸軍七五連隊第二機関中隊第二大隊砲小隊に配属され猛訓練に明け暮れ、三年半過ぎ、そろそろ満期除隊と、指折り数えていたらとんでもない、部隊は一部補充員を残し戦友は勇躍激戦の続く南方戦線の出動。これから生死を共にと誓った戦友と一生の別れとなった。

二、昭和二十年八月九日ソ連軍国境を越えて満州領内に侵入との報に、兵器係下士官として急遽輸送の責任者となり陣地直前終戦の命令下る。

やがて武装解除され、「スコラダモイ、スコラダモイ（間もなく帰る）」の言葉にだまされながら送り込まれたのが荒れ果てた幽霊屋敷のような沿海州ハバロフスク地区の第三〇一収容所で、阿部氏を中心にエンジニア（技師）として志賀、佐々木、私と四人は建築関係の仕事を命ぜられる。

帰国後分かったが、ヒドイ処遇を受けた他の収容所に比べ、良き指導者、環境に恵まれ犠牲者も殆ど無く、只栄養失調と厳しい寒さ、適しないノルマ（作業基礎量）に追いかけられる苦勞の毎日であった。しかしそれにも増して捕虜の心を苦しめたのは民主化運動の嵐であった。

三、私は時には泥土の穴掘りなども経験したが、

二十四年二月三〇一収容所五百人と共にコムソモリスクの第六収容所へ移され、ここで八月ダモイの日までレンガ建築等のエンジニアとして阿部氏と共に働いた。ナホトカで日本の輸送船「明優丸」の甲板に立った時は感無量、陸を離れ行く船上より力いっぱい声を張りあげて、ドスビダーニア、タワリツシ、ソウビエトスキー、オーチンスパシボー（さようなら、ソヴェットの皆さん、大変お世話になりました、感謝いたします）、と四年間の思い出に涙が潤むくらいだった。

故郷を離れて丸八年、人生の花咲く青春時代を母国日本の繁栄を祈って力の限り生きてきました。舞鶴港を望見した時、これが私の国ニッポンなのだと、しみじみ感激にふけりました。